

第10回 ふくい建築賞

受賞作品

【大規模建築部門】

《最優秀賞》

TSURUGA POLT SQUARE 「otta」

設計者：(株)走坂建築設計事務所 水上 諭

施工者：技建工業(株)

《優秀賞》

waraku

設計者：h+ARCHITECTS 伊藤 瑞貴

施工者：(株)関組

《奨励賞》

越前町役場本庁舎

設計者：(株)木下設計 木下 貴之 梶 久二雄

施工者：(株)松田工務店 (株)キョエイビルド

タケウチ住建(株) 岬建設(株)

特定建設工事共同企業体

【中小規模建築部門】

《最優秀賞》

SOW - yoshimitsu open space -

設計者：小笠原弘建築計画 小笠原 弘

施工者：岡田木材(株)

《優秀賞》

my name is...

設計者：basio一級建築士事務所 八木 美津雄

施工者：(株)三田村工務店

《優秀賞》

柄と繪

設計者：(株)ハッカ 丸山 晴之

施工者：大須賀技建(株)

《奨励賞》

つきあたり

設計者：禄設計 林田 博之

施工者：(株)さがみ建築

【住宅建築部門】

《最優秀賞》

丸岡の家

設計者：清水隆之建築設計事務所 清水 隆之

施工者：サカイ建設不動産(株)

《奨励賞》

M-HOUSE

設計者：(株)BAUM建築設計事務所 岸名 大輔

施工者：(株)BAUM



第10回ふくい建築賞 報告

ふくい建築賞実行委員会

矢 尾 憲 一

建築士会・建築士事務所協会・JIA建築家協会の設計3団体が主催し、福井県の建築業界の人材育成を目的に創設された「ふくい建築賞」は、今年度で10回目の開催となります。募集は前回同様の昨年10月2日～12月15日までで、大規模建築部門（延べ面積が500㎡以上）5点、中小規模建築部門（同500㎡以下）6点、住宅建築部門5点の合計16点（昨年9点）の作品の応募がありました。

今年も県内建築関係9団体の協賛と県・福井市をはじめマスコミ4社の後援をいただきました。心より感謝申し上げます。

一次審査は1月12日応募書類により実施。審査は蜂谷俊雄（としお）委員長（金沢工業大学教授）、野嶋慎二（しんじ）委員（福井大学教授）、清水俊貴（としたか）委員（福井工業大学准教授）の3名により慎重な議論を経て、大規模部門3点、中小規模部門4点、住宅部門2点の計9点を二次審査対象作品に選びました。

二次審査は2月23・24日の2日間にわたり審査委員が県内一円の現地を訪れ、直接設計者から説明を受けました。その結果、大規模部門2点、中小規模部門3点、住宅部門1点を最終審査対象作品に選びました。また「越前町役場本庁舎」「つきあたり」「M-HOUSE」を奨励賞として選びました。

最終審査は3月23日（土）福井県中小企業産業大学校にて約60人の聴衆が見守る中、公開審査会が開催されました。開催に先立ち、本年からこの建築賞の審査委員として参加された野嶋慎二（福井大学教授）様より「地方都市における自律的でウォークブル都市のデザイン」と題した講演会が行われました。福井県内の駅舎や学校など、先生が設計にかかわった建物の写真を見せていただきました。

引き続き、最終審査にノミネートされた作品の設計者による各15分間のプレゼンテーションと質疑応答を経て、公開による熱心な議論が行われた後、部門毎に審査委員による採点と講評が行われました。

住宅部門は審査作品が1つのため、最優秀賞に相応しいかの議論となりました。名誉ある最優秀賞に住宅部門「丸岡の家」（26点）、中小規模部門は



審査風景

「SOW-yoshimitsu open space」（26点）、大規模部門は「TURUGA POLT SQUARE「otta」」（26点）が選出されました。また、優秀賞に中小規模部門「柄と繪」（25点）、「my name is…」（25点）、大規模部門「waraku」（23点）の3作品が選ばれました。（（ ）内は獲得点数：30点満点）

各部門とも審査委員による作品の評価順は割れる傾向となり、最優秀と他作品に大きな得点差はない公開審査会でした。

審査会の最後に蜂谷審査委員長より総評があり、奨励賞作品への評価とアドバイス。また各部門作品の特徴と評価が分かれた要因など、解説をいただきました。特に中小規模部門の3作品については、大きな差は無く微妙な判断であったと、お言葉を頂きました。

この建築賞も創設以来10年目となり、今回はコロナ禍の影響から抜け、応募数が増加しました。この活動は県民に理解され支持されるためには、継続していくことが大切です。多くの作品参加が「ふくい建築賞」の原動力です。会員の皆様の来年度の応募をお待ちしています。



授賞者記念撮影

■ 第10回ふくい建築賞 総評

審査委員長 蜂谷 俊雄（金沢工業大学教授）

今回で2回目の審査になります。応募書類と短時間の現地審査による評価になりますが、どの応募作品にも審査からは計り知れないご苦労があったはずです。各作品の評価は審査員の見識や価値観でなされますが、その評価が絶対に正しいとは言えません。以下に本審査を通して私が思った事や各作品に対する評価を記述させていただきます。

本建築賞の特徴に「応募者は福井県に在住の建築士資格を有した設計者」という規定があります。昨年の審査総評では、他県の建築賞と異なるこの特異性について詳しく記述いたしました。この規定により著名建築家や大手設計事務所の作品がないこともあり、自己主張の優先や賞を狙う姿勢ではなく、気負うことなく自然体で設計がなされているという印象を受けました。ここに地域限定の普段着の会話が生まれる本建築賞の良さがあるように思います。また、建築雑誌等で紹介されていなくても、厳しい姿勢で設計に取り組み、高いレベルの成果を出されている設計者とお会いすることができました。

最終審査では各審査員の作品に対する評価点が揭示されましたが、3名の審査員の各作品に対する評価点がほとんど同じであったことに驚きました。これまで多くの建築賞の審査を経験してきましたが、審査員によって意見が異なることが一般的でした。その理由を明確に説明することは難しいのですが、共通する見識や価値観があったのではないかと思います。今回受賞した作品には、数年前に書類審査で落選した作品がありますが、今回の審査では3名の審査員全員がその作品を高く評価しました。審査員が変われば別の評価があるということです。

最終審査会で特筆すべきことは、中規模建築部門の最終選考に残った3作品のレベルが高かったことです。3名の審査員の評価点はほとんど同じで、どの作品が最優秀賞に選ばれてもおかしくない状況でした。類似する取組テーマであれば差を付けやすいのですが、『吉本興業』は福井独自の建築素材を開発する挑戦的姿勢、『my name is...』は人々が寛ぐ心地よい居場所をつくろうとする姿勢、『柄と繪』は求めるイメージに近付こうとする設計者の厳しい姿勢が評価されました。設計者が取り組む「・・・の姿勢」と表現しましたが、異なる取り組み姿勢で各々高いレベルに達していました。その中から『吉本興業』が最優秀賞に決まったのは、福井独自の素材開発を強くアピールされていたからです。

■ 丸岡の家（住宅建築部門）

本作品のような66㎡（1F:33㎡+2F:33㎡）の広さで、コストを抑えながら4人家族が住む2階建ての小住宅を設計する場合、挑戦すべき意匠・空間テーマの自由度に限りがあることから、多くの場合は無理をしない平凡な方向に進み、時には極端な発想の形態に走ることがあります。本作品の優れたところは、極端な方向に進むことなく、設計テーマをマクロ的発想とミクロ的発想に分けて考え、住み手のライフスタイルをイメージしながら、スケールの異なる想いの広がりや部分のアイディアを結び付けながら、異なるスケールの視点で楽しめる居住空間の特徴が出せているところです。

応募資料には本作品の特徴や魅力がスケッチ等で示されていました。正方形平面の2階建て方形屋根の単純な形態の中心に、鉄骨丸柱とそのまわりの階段を囲いつつ2階床を支える円形の厚鉄板があります。マクロ的設計の主役はまさに丸柱と円形の厚鉄板の存在であり、これらを中心に1階の諸スペースや2階のLDKが展開しています。特に2階のワンルーム空間では細い大黒柱が空間に緊張感を与え、階段を囲む厚鉄板の手摺がワンルームの中の「くつろぐ」、「学ぶ」、「食べる」、「調理する」という行為の領域を分けながら、一体感をもたせるミクロ設計的役割も担っています。

上記のように設計者のコンセプト説明はマクロ・ミクロという表現でなされていますが、少し理屈っぽく感じました。私が高く評価したのは、「一本の細い大黒柱と2階に昇る階段という2階建て住宅を成立させる2つの構成要素を特化し、それらに空間を律する主役の座を与え、ギリギリの中で禁欲的に設計されていることでした。

■ M-HOUSE（住宅建築部門）

正面アプローチ側から見た外観の姿として、母屋の家形の表現と自転車小屋の水平にのびる木材面の表現を並べて対比的に見せていることや、母屋壁面に「田の字」形の特別な窓枠を挿入していることが、当地の場所性や住居らしい表現として好ましいものに見えました。

内部では各個室（3つの寝室と書斎）とLDKスペースの間に3～6段のステップが挿入されていたのが特徴でした。隣接する個室とパブリックスペースを限られた面積で分ける場合、小廊下とドアで区切ることが一般的ですが、数段のレベル差を挿入することで、意識の切替と場の転換を図っています。現代の建築設計では、レベル差があることは不便であり、躓く危険性があるという理由で忌避されますが、日本の古建築の数寄のこころを生かした極小の空間の操作においては、ちょっとした上昇や屈折を

入れることで意識の切換と場の転換を図っていた名作がありました。本作品の当該部分を見て、そのような事を連想しました。

■吉光工業（中規模建築部門）

本作品の特徴は、越前瓦による織り上げ壁材を開発し、福井県ならではの建築材として本作品で具現化したところにあります。応募者の説明によれば、越前焼・越前瓦は陶板として使われてきましたが、陶板というものはその地域の特産の焼き物で作られるもので福井にしかないものではありません。（〇〇焼タイル等）それに対し、本作品においては福井の特産品である織物のイメージと融合させることで他県にはない県産材に昇華させ、建築界に新たな表現要素を提示しています。食器の例になりますが、金沢では伝統的な九谷焼の魅力とワイングラスを融合させた商品が生まれました。地域独自の伝統文化の継承とは、時代が進み、新たな技術が入ってくる時に、それを拒絶するのではなく、お互いの価値を生かしながら融合し、新たな発展形を生み出していくものと思います。このような意味において、越前瓦による織り上げ壁材を開発されたことの意義はきわめて大きいと思います。

建物全体としては、木造の単純な形態に力強いRC打放の自立壁が貫入し対峙するイメージが強調され、建築の主要材料であるコンクリートと越前瓦による織り上げ壁材が呼応する抽象的な環境アートのように見えました。ただし、織り上げ壁材を支える構造が建築本体と同じ木材になっていましたが、織り上げ壁材の魅力さをさらに高めるためには、構造を細い鉄材とし、上部の庇屋根を無くした方がより自律的に見えたのではないかと思います。

■my name is...（中規模建築部門）

武生駅前にあるカフェで、「自然素材との調和」、「先進的で洗練された印象」、「街に新たな魅力をもたらせられる心地よい空間」を設計者はデザインコンセプトにされています。さらに本作品の魅力について深掘りするとすれば、建築の形態や空間の構築よりも、お茶を飲んで寛ぐ人々の居場所の創出に重点をおき、内外に渡るレベル差を階段状に演出し、時々気分よく居心地の良い場所を選んで時を過ごすことができる場の形成にあると思います。

ローマのスペイン階段や丸岡中学校の大階段空間など、魅力的な階段状空間は時代・文化をこえて世界中に存在します。本作品の独自性としては、さらに階段状空間を駅前・室内側・2Fテラス側の3方向に展開していることです。限られた面積の中での立体感の演出と、歩道側にのびる屋根庇と呼応した

お立ち台的表現など、大きなスケールと階段状の小さなスケールがバランスよくまとめられています。特に水平にのびる駅に向かうお立ち台の下の不思議なスペースは、大人が入れない高さですが、駅前から見える建物全体の姿に軽快さを与え、また、歩道を歩く人への圧迫感を軽減しています。場所は武生駅前ですが、これがもし東京の竹下通りに建っていたら、高校生が思い思いの座り方でごった返しているものすごいシーンが生まれていたことでしょう。

■柄と繪（中規模建築部門）

建築の全体から部分、さらに素材やディテールに至るまで、設計者の厳しい設計姿勢が漂う、緊張感のある作品です。伝統産業である「越前打刃物」の小規模なギャラリーですが、道路側の外観は2層を横方向に強調する屋根と付庇で二段に表現し、壁面は弁柄色の木材の縦線を基調とし、他は透明ガラスで開放的につくられています。建築として必要な個々の構成要素を吟味しながら設計を進める厳しい取り組み姿勢が伝わってきました。

付庇を支える腕木材は内部までのびる必要がありますが、その室内でのリズム感や上部の2階床との重層的表現は、立った目線で心地よく感じられました。また、展示室内の素材は木材・金属・ガラスに限定され、開口部の片方には道路側の樹木が見え、他方にはストックヤードの様子が見えるという対比的演出の面白さがありました。つつい妥協して中途半端な要素を入れて建築をつくってしまう傾向があるなかで、求めるイメージに近づこうと厳しい姿勢で設計されていることを高く評価しました。

■つきあたり（中規模建築部門）

先祖代々340年住み続けられた地域の名家の土蔵を解体し、古材を再利用して組みあげられた新しい時代の飲食スペースと、新築された厨房の対比的表現の魅力を生み出した作品です。江戸期から現代までの時間軸の中で生き続けた土蔵にどのような価値を見出し、また、新たな時代の感覚をどのように盛り込むかについて、設計者は5年をかけて取り組まれました。説明資料の中には、「閉じていた蔵をひらく」ことで、地元の拠点として生まれ変わり、これからは地元とのつながりを大切にしていこうという思いが記されていました。また、工事プロセスも解説入りの写真で示されていました。事業主と設計者の歴史を重んじ未来につなげていこうとする熱い思いが伝わってくる改修作品でした。

厳しい予算内でのことと思いますが、外観は第一印象として土蔵の改修には見えませんでした。しかし、内部に入ると土蔵の屋根を支える小屋組みの迫

力が迫ってきました。また、二層高さの通し柱の形状が、樹木の自然な樹形そのままの状態を表したものであり、地場の樹木をそのまま柱材にして組み上げた築造当時のシーンが甦るような魅力を感じました。

■TSURUGA POLT SQUARE「otta」(大規模建築部門)

北陸新幹線の敦賀延伸を見据えた敦賀駅西にある市有地の再開発です。駅前ロータリーから連続する場所であり、駅前の人の流れを誘引するように、ロータリーの屋根付歩廊と呼応した黒色の屋根付歩廊が敷地内に連続しています。このような開発は広場や建築を単体で評価するのではなく、新幹線開業後の敦賀駅西地区全体との関係で見る必要があります。これまでも全国で新幹線開業に合わせて駅前広場が再整備されてきましたが、本再開発の特筆すべき特徴は、駅前ロータリーに接する敷地に様々なイベント等が開催できる公園スペースが確保されたことです。経済の論理で考えれば、駅前ロータリーに面する敷地には商業・業務・宿泊施設等が建ち並びます。駅前ロータリーに接して公共スペースが確保できたことは未来の敦賀駅前への貴重な投資になることでしょう。

公園として見た場合の広場の景観デザインは抑制の効いたシンプルなものですが、イベント等で賑わう情景をイメージすれば、デザインの意図が理解できます。ここで重要なのは公園デザインが主役になるのではなく、この場の活動に参加する人々のアクティビティの刻々と変化する時間風景が主役になるということです。劇場のステージ上の主役が演技者と舞台セットである関係と類似しています。このように考えると、広場と店舗の間にある屋根付歩廊もシンプルで抑制の効いた表現になっていることで、駅前ロータリーも含めたランドスケープデザインとして高く評価できます。

■waraku (大規模建築部門)

高齢化社会に備えて高齢者入居施設が全国で多数整備されてきました。新しい施設の傾向として、閉じた施設ではなく、地域社会に開かれたイメージをアピールする事例が増えています。本施設においても「地域に開かれた、包括的医療の拠点」として、

様々な用途に使用できるキッチン付きの地域に開かれた「陽だまり広場TANE」を設け、地域活動・世代間交流・ボランティア活動・相談会等を通して、人と人がつながる場所となっています。

「高齢者施設は落ち着いたイメージとすべき」という固定観念は本施設にはなく、むしろここで働いている人や集まってくる人に好まれる明るく透明感のある空間演出になっています。さらに、このイメージは各階をつなぐ階段空間にも連続し、むしろ都市的な軽快さを感じさせるものでした。外観においても、町屋で使われているような繊細な表現を盛り込むなど、厳しいコストの中で細部にも工夫がなされていました。「周辺環境に溶け込みながらも存在感のある、地域をあたたく照らす行燈のような、まちとつながる建築」を目標に、関係者の皆さんが努力された成果は見えて取れました。しかし一方で、田園風景の中に建てられた4階建てのヴォリュームの存在感は圧倒的で、「周辺環境に溶け込ませる」という目標には限界があると感じました。

■越前町役場本庁舎 (大規模建築部門)

「地域の中心的な施設である町役場を、地域特性を生かし町民から慕われる施設としたい」ということが、本作品の設計で最も重視されたポイントであると応募書類に記されていました。外観では地域の伝統的な民家にある格子組と漆喰塗の白壁に通じるイメージとして、日差しよけの庇とPC版縦ルーバーのグリッドで構成された環境調整装置が漆喰を思わせる白色に塗装されていました。また、地元の材料として、1階外壁の越前焼タイル、日差しをコントロールする越前焼の格子ルーバーや越前町産材の木ルーバー、内装壁には越前町産木材、床には越前焼タイルが使用されていました。

以上のように、「地域特性を生かした地場産の素材」をふんだんに使った庁舎建築でした。一方で、「町民から慕われる施設」という視点で見ますと、町民が役場に特別な用がなくても自然に集まり、様々な行為や活動を誘発・展開できそうなスペースが不足しているように思いました。自宅でも職場(学校)でもない第三の居場所(サードプレイス)としての魅力を庁舎のパブリックスペースが担う時代になりつつあります。

■第10回ふくい建築賞 講評

審査委員 野嶋 慎二(福井大学 教授)

人口減少、多発する災害、環境負荷の課題、デジ

タル化の進展による暮らしの変化など、我が国の建築を取り巻く社会情勢は急速に変化している。建築が社会に働きかけ、地域の持続可能性にいかに関与するかも、建築のあり方として重要となってきてい

る。今回発表された候補作品は、地域の文化・歴史、コミュニティ、賑わい、景観などを意識し、それぞれテーマを持って取り組んでいる作品が多く、質の高いものであった。各々の受賞作品について感想を述べたい。

大規模建築部門

1.TSURUGA POLT SQUARE 「otta」

敦賀市が所有している土地（47,416㎡）で一連の開発が行われ、既に研究施設、敦賀駅交流施設、駅前広場、駐車場が完成しており、「otta」はその最後のプロジェクトとして民間活力利用のためPFI事業で行われた。このプロジェクトの秀逸な点は配置計画とそのデザインである。緑の芝生広場を取り囲むように建物が配置されており、キャノピーが作られ、これは既存の駅前広場のキャノピーや駅施設とも繋がり、うまくデザインされており、駅からホテル棟さらにその外側まで繋がる魅力的な都市のシークエンスを創出している。駅前でありながら、ヒューマンスケールで居心地の良い広場空間が創出され、市民の憩いの場となっている。広場のランドスケープのデザインも良く、シンプルでありながら気持ちの良いデザインが施されており、建物とも上手く調和している。アーバンデザインの重要性を改めて感じさせてくれる作品である。

2.waraku

介護福祉は地域全体で支える環境を整えることが重要であり、その拠点づくりを行おうとする考え方はとても良い。そのため外壁の形や色、キャットウォーク、内部のブラインドや照明にも配慮し、周辺の風景と調和させようとしており、建築自体も周辺環境と調和する外観を心がけていることが評価できる。さらに「陽だまり広場TAME」と名付けられた、地域活動・世代間交流の場は、やわらかいデザインやしつらえとなっており、外とのつながりも意識され、多様な活動が行われる居心地の良い場所になっている。コミュニティ作りのプログラムと上手く連動した建築のあり方を示してくれる。

3.越前町役場本庁舎

この建築は、役場庁舎であるが、既存の生涯学習センターと連結させることにより利用促進を図る複合建築として計画されている。その連結する場所は、中庭を回遊するようにイベントスペースが作られていて、エントランスホールの脇に市民の憩いの場が作られている。またエントランスホールは、三層吹き抜け空間でハイサイドライトにより明るく開放的でありながら、木製ルーバーなどの設により、

落ち着いて気持ち良い空間が作られている。全体的に越前町の焼き物や県産材などの部材を多用し、地元の文化を感じさせてくれる庁舎となっている。

中小規模部門

1.SOW-yoshimitsu open space-

木造の架構を見せた長方形のガラスの建物と、L型の打ち放しコンクリートの壁を、角度をずらして組み合わせたシンプルな空間構成であるが、それにより外部空間と内部空間が仕切られ、多様な場所が創出されている。

越前瓦による織り上げ壁材は、オーナーと設計事務所が越前の特産である越前瓦と織物を融合させて開発した建材である。これをガラス面と2m離して道路側に置くことにより、伝統工芸の重厚な存在感がありながら透明感がある独特で美しいファサードが作られている。また、ダブルスキンの構成となっており、挟まれた空間は程よい緩衝空間となっている。建物コーナーのL型の鉄骨で美しく作られた雨樋など、きめ細かく考えられた収まりが随所に見られ、建物全体として一つの工芸作品となっている。

2.柄と繪

伝統工芸産地は単に工場の集積地ではなく、工芸文化が宿る場所でもある。

この建築は、打ち刃物の柄と蒔絵の創作の場、消費者との交流の場を作ることにより産地を盛り上げようとしている。ガラス越しに材料の木材を見ながら完成品の包丁を鑑賞できるギャラリーは、小規模な空間をガラスで仕切るシンプルな空間構成であり、ここが産地であるという広がりを感じさせてくれる。また、手きざみによる木材の架構、左官仕上げ、和紙などの自然素材や細やかなディテールは、工芸文化に包まれた感じを引き立たせている。外部の斜面緑地の景観もうまく活用し、工芸文化の宿る場所としてデザインされた優れた作品であると言える。

3.my name is・・・

武生駅前の角地という街にとって重要な場所に立つカフェである。

さほど広くはない空間の中において、デッキと階段を上手く組み合わせ、立体的で魅力的なシークエンスを創出していることが評価できる。エントランスから階段ギャラリー、2階客席、外部の2階テラス、デッキ階段状ベンチ、1階テラス、エントランスに戻るというシームレスにつながる回遊空間を立体的に創出している。中から外、外から中へ場面が切り替わり、その動線に様々なシーンと心地よい場所が創出されている。また1階テラスのデッキが、

通りとの程よい緩衝空間となっており、駅を眺める気持ちの良い場所をつくっているだけでなく、立体的なデッキが造る形態は駅からの風景を演出している。建築空間の面白さを体感できる優れた作品と言える。

4.つきあたり

伝統的な農家の歴史のある建物を再生させ、カフェ機能を入れて地域の人に開くことで、地域コミュニティの魅力的な場所を作っていることが評価できる。

既存の蔵を解体し、2階部分を取り払うなどの改造をしているが、既存の部材を極力再利用し架構を継承することで、歴史を継承しながら、新しく気持ちの良い空間を創出している。立体的に曲がった木材の柱はそのまま使われ、キャンバスとしての白い壁の表面に茶色の曲線模様のように映し出され、デザインされた壁面のようになっていて面白い。古い部材を活用したデザインが各所で施され、歴史的な建物と対話しながら丁寧に再構築されたそのプロセスも評価できる。

住宅建築部門

1.丸岡の家

正方形の建物の中心に鉄骨柱が立ち、それを中心として円形の鉄板で囲まれた直径約1600の階段室を置き、その周辺に部屋を置いたシンプルな構成である。1階は、水回りや寝室や子供部屋で仕切ら

れ、中央の円形の階段室は上部から程よく光が注がれ、登りたくなる階段空間である。2階に行くと、仕切りのないキッチン・リビングがあり、中央の鉄骨の円柱の効果もあり、あたかも大きなテントの中にいるような一体感と面白さがある。階段室の円形の立ち上がり（900mm）が室内を程よく仕切っており、また室内を回遊することを可能にしている。6m弱の小さな方形の建物の中央に階段室を配するシンプルな空間であるが、天井の高さを程よく押さるなどスケールを考え、また建物周囲の窓の位置や形を計算するなど、きめ細かいデザインにより豊かな空間を創出しており、建築の楽しさを感じさせてくれる作品である。

2.M-HOUSE

L字型の建物と自転車置き場が庭を取り囲んだ構成であり、静かな住環境を創出している。平屋（一部ロフト）で高さを抑え、きつめの屋根勾配と四角い窓を持つ洋風の切妻面は、ヒューマンスケールな景観を作り出している。内部空間も、天井高も極力おさえ、落ち着く空間を作り出しているが、木造の梁を見せ、全体を白い壁と木で構成するなどのシンプルな設が、空間の豊かさを作り出している。庭に面したリビングを中心とし周囲に各部屋を配置するように動線が組み立てられ、リビングを必ず通り、視線が向くように計画されており、家族の憩いの場としての空間のあり方を示している。

■ 第10回ふくい建築賞 総評

審査委員 清水 俊貴（福井工業大学准教授）

以下、最優秀、優秀、奨励賞と選定された各作品について、三つの審査過程（書類審査、現地審査、公開審査）にて考えたこと、選択した理由について記述します。

大規模建築部門

1.TSURUGA POLT SQUARE「otta」

駅のすぐ横に、とても魅力的な本にまつわる施設があり、ちょうどよい大きさの気持ち良い広場があります。本屋のボリュームが一番大きく感じられる公共性のあるスケール感、来る人を選ばない空間が実現されています。ディテールよりも全体的なありようがよいです。ただ広場に面した店舗棟の閉鎖的なガラス面が気になりました。広場と店舗が視覚的に以上につながって感じるような、例えばもっと開閉

する窓や扉が多いとか、割り切って屋内外の仕切りがないとか、喧騒が感覚的につながる工夫がもっと見えると、より計画の良さが引き出されたのではと、感じました。

2.waraku

高齢者施設の仕様・仕上の選択を入居者からイメージするより、子供や孫世代の嗜好や、あるいは地域の自然から選択していることが、建物の特徴だと考え、現代的高齢者施設の姿として評価しました。道路向かいにある商業施設のコンテナのような倉庫のような姿は福井の田園地帯でよく見かける風景ですが、一体的に街をつくっている姿に魅力を感じました。書類審査で謳われていた町屋や格子など歴史的な要素との接続は、現地審査であまり感じられませんでした。見学が難しいのかもしれませんが、施設の本来の目的である入居者のための個室を拝見できなかったことが残念です。格子に囲まれた大

きな開口部からの風景とか、眺めて過ごす楽しさとかを、現地で実感できたのかもしれない。

3.越前町役場本庁舎

現地審査にて、建物正面にスケール感を作り出しているスチールの格子と軒裏の木材の経年変化の違いが気になりました。異なる素材同士が、互いの特徴を発揮しながら調和する仕様・仕上の選択について、自分ならどうするだろうと考えました。

中小規模建築部門

1.SOW – yoshimitsu open space -

前面道路に面した、繊維の編み目の様なタイルの立面が印象的です。単に表面的なランピングではなく、日射や視線を透かして屋外から屋内に入ってくる情報をコントロールする素材として、編み目の特徴を建築空間に取り込んでいること、繊維産業の歴史を持つ福井のアイデンティティに結びつけていることを大きく評価しました。ただ編み目タイルやコンクリート塀と内部空間に囲まれた坪庭や、テラスのようなスペースに、もう少し自然の変化が感じられる工夫があると、より内部空間が引き立ったのではないのでしょうか。

2.柄と繪

匿名性の強い工業団地の工場群の中で、「顔」を作り出す工夫を評価します。木材とサッシや屋根材料などの工業製品との混ぜ具合、襖の裏紙を使用した什器など、工業的でもあり、手仕事のでもある、ふくいのものづくりの見せ方を空間化していることに魅力を感じます。書類審査で謳われていた工場との連続性を常を感じるような工夫が、空間的にもう一つ欲しいと感じました。気候的にシャッターを閉じていることが福井では多いでしょうから、コンセプトを実現するための工夫が、気候に贖って成立している様な表現がみたいです。

3.my name is...

防火地域において店舗建築を木造2階建てで実現するための耐火建築物として、木材を法令で定められた石膏ボードで覆いつつ、どのような魅力ある建築表現を行なっているのが最大の評価点です。建築法規による「しぼり」の大きい建物本体を比較的シンプルに構成して、武生駅側に向けて段状の大きなデッキテラスをつくりだしています。屋内の大きな吹抜けを中心に雛壇のような座席と階段が、屋外のデッキテラスと一体になり遊具のような空間を作り出していることが、お店としても大変魅力的でした。武生駅前の一番目立つ場所に、屋外も屋内も楽

しく過ごせる場所、空間ができていることがよいです。反面隣地側に向けた立面の割り切りが悩ましいところでは。

4.つきあたり

元々使われていた、くねくね曲がる通し柱により立ち上がる空間が魅力的です。既存の木部材を生かした内装が面白く、カフェとして長居したくなる空間が作られていることを評価しました。

住宅建築部門

1.丸岡の家

書類審査で設計者より提出されていたプレゼ資料で語られていた「マクロな設計」「ミクロな設計」という設計表現が魅力的でした。住宅において設計表現を行う上で、施主の要求を超えて公共性のある建築の表現を行うべきか、そもそも住宅における公共性ってどこにあるのだろうか？という自分に問いたくなりました。設計者として共感を感じるプレゼでした。福井という土地柄の印象として、住宅を大きく広く作りたい志向を感じていたのですが、現地審査において、この住宅が小さくコンパクトに成り立つことを志向していること、実現するためにギリギリの寸法スケールを得ていることに魅力を感じました。

2.M-HOUSE

L字型にプラン以上に、パブリックな居間と個室やホビールームといったプライベートな部分の関係を段差で成立させていることが魅力です。現地審査にて、個室とパブリック部分、屋外部分との連続や段差の理由を実感できるプレゼや解説がもう少しあってよかったかもしれません。

以上、今年も現地審査、公開審査と設計者並びに建築主の方々のお話をお聞きできたこと、誠にありがとうございました。今年は例年に比べて、公開審査にて講評の時間が長くとれたこと、よかったと感じました。主催者のみなさま、お疲れ様でした。福井にいと、批評とか議論とかを相手と行うことが少ない、苦手なのかなと感じます。悪口ではなく、批評とか議論がないと、振り返りも、その先にある新しいさや、次なるクリエイティブも生まれないと考えています。ふくい建築賞が、より批評的で、応募したくなるようなイベントであることを願っています。



【最優秀賞】 TSURUGA POLT SQUARE 「otta」

新幹線延伸を見据えた、敦賀駅西にある市有地の再開発案件である。公設民営で運営する日本初の『知育・啓発施設』であるブックストアを内包し、ホテルを設置するのが条件としてプロポーザルが行われた。増加する来訪者と、それだけでは真の賑わいを生むには難しいであろう地方都市において、地元民が集える場をどのように整備するかがカギとなった。様々なスタディを経た結果、公園を中心とし様々な施設を配置する現在の案に収束した。

また、その過程において社会実験として、飲食施設の場所にはケータリングカーを誘致し、公園位置には置き敷きの芝生とパレットで出来たウッドデッキを仮設、知育・啓発施設位置ではワークショップのイベントを行った。開業後の賑わいが社会実験の効果を如実に表している。訪れる全ての方が、様々な場所で思い思いの時間を過ごされるシーンを多く見かける。

設計監理：(株)走坂建築設計事務所 水上 論
丸善雄松堂 大久保浩正
施 工：技建工業(株)

建築位置：福井県敦賀市鉄輪町1丁目
工 期：'21年10月～'22年7月
構造規模：低層棟：S造・地上1階
複合棟：S造・地上2階
敷地面積：低層棟：1,261 m²
複合棟：1,451 m²

建築面積：低層棟： 652 m²
複合棟： 929 m²
延べ面積：低層棟： 710 m²
複合棟：1,268 m²

【優秀賞】 waraku

設計監理：h+ARCHITECTS

施 工：(株)関組

建築位置：福井県若狭町

工 期：'20年10月～'22年2月

構造規模：鉄骨造・地上4階・塔屋1階

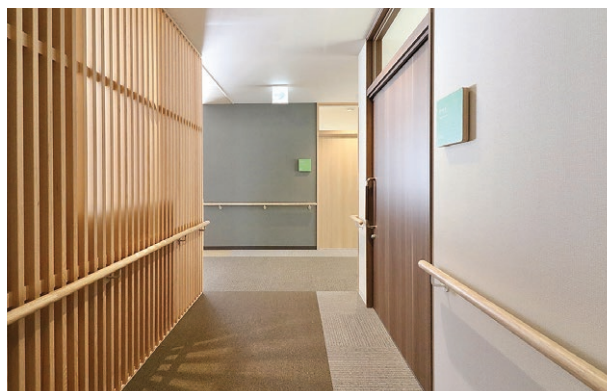
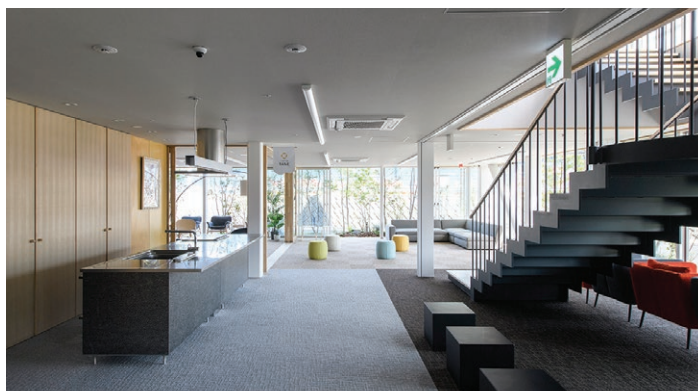
敷地面積：2,322 m²

建築面積：762 m²

延べ面積：3,057 m²



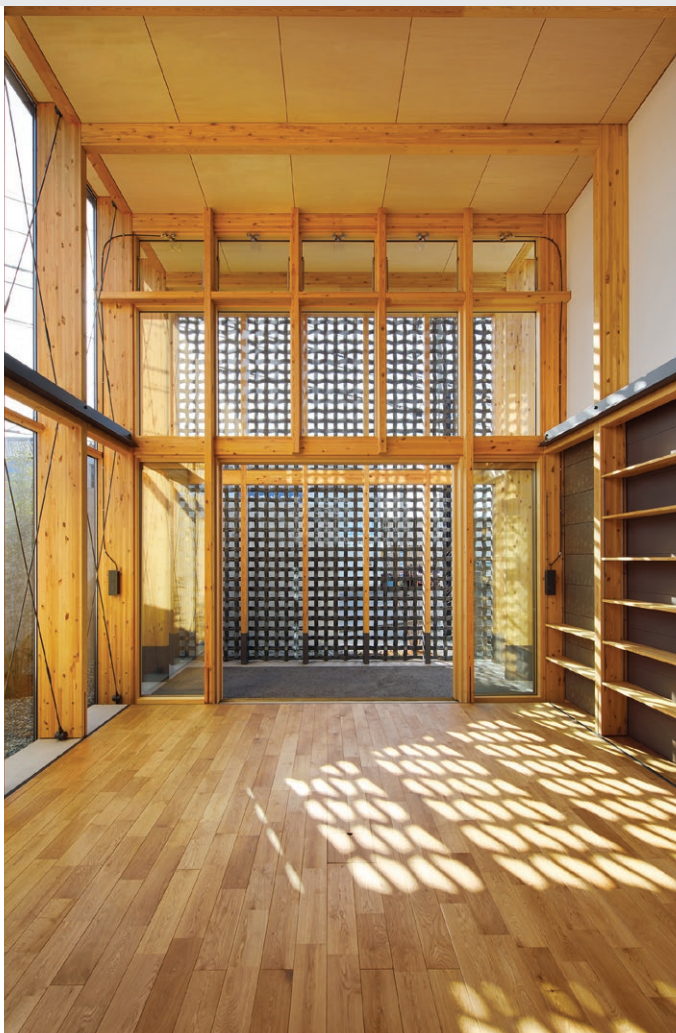
のどかな田園風景の中に建つ、地域に開かれた「陽だまり広場TANE」をもつ高齢者入居施設です。「快適な住環境の整備」「地域コミュニティの維持形成」「地域包括ケア体制の強化」「若者が働きたくなる環境整備」を行うために、3つのつながりのある、まちを元気にする、持続可能な介護福祉の拠点づくりをおこないました。



■ 第11回ふくい建築賞作品募集 ■

応募期間：2024年10月7日～12月20日

詳しくは、募集リーフレットをご覧ください。



【最優秀賞】 SOW -yoshimitu open space-

設計監理：小笠原弘建築計画
施 工：岡田木材(株)

建築位置：福井市高木中央
工 期：'20年5月～'21年1月
構造規模：木造・地上1階

敷地面積：236 ㎡
建築面積：70 ㎡
延べ面積：68 ㎡



【優秀賞】柄と繪

設計監理：(株)ハツカ
施工：大須賀技建(株)

建築位置：福井県越前市池ノ上町
工期：'19年11月～'20年8月
構造規模：木造・地上2階
敷地面積：303 m²
建築面積：113 m²
延べ面積：173 m²

柄をつくる会社、山謙木工所が業界内の立ち位置を超えて伝統産業「越前打刃物」を盛り上げるためにつくるギャラリー「柄と繪」。

単なる展示・販売スペースではなく「完成品の包丁」と「材料である木材」の両方の関係性を示す「透過する2つの間」を提案。無機質な工業団地の中、雑木の法面との対比として朱色の外観とし、グレーで統一された内部によって包丁や材料を魅力的にみせる交流の場となっている。

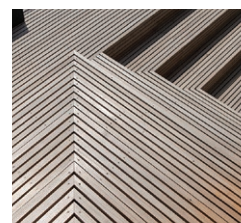
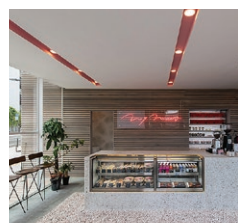
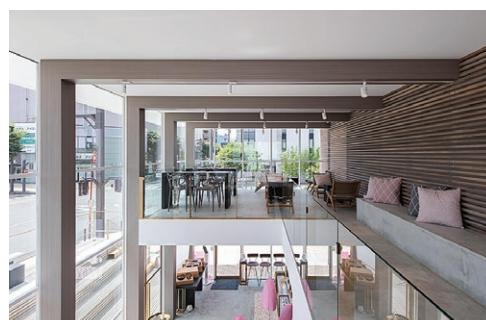


【優秀賞】my name is...

設計監理：(株)basio 八木美津雄
施工：(株)三田村工務店

建築位置：越前市府中
工期：'20年4月～'21年1月
構造規模：木造・地上2階

敷地面積：460 m²
建築面積：91 m²
延べ面積：143 m²



【最優秀賞】 丸岡の家

＜スケールの異なる2つの設計＞

設計監理：清水隆之建築設計事務所
清水 隆之

施 工：サカイ建設不動産(株)

建築位置：福井県坂井市丸岡町
工 期：'21年8月～'22年3月
構造規模：木造・地上2階
敷地面積：244 m²
建築面積： 35 m²
延べ面積： 66 m²

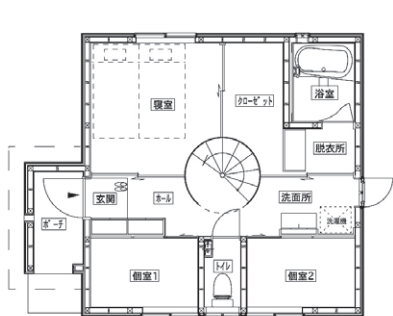
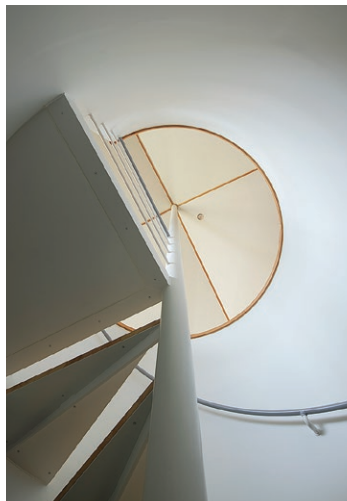


敷地は丸岡城を望む城下町。四人家族が住む平屋の住宅を建て替え、新しい家を築く。

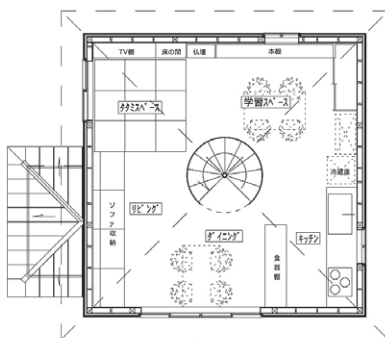
ヒアリングを重ね、土地の風土を読み取り、生活の様子をよく観察することから設計を組み立てた。小さな住宅ではあるが、広い世界へと繋がる巨視的な視点と生活を読み取る微視的な視点をもつことが有効と考えた。

経済学の分野における、世界市場を見る＜マクロ経済＞と個人消費を見る＜ミクロ経済＞という考え方に倣い、＜マクロ設計＞と＜ミクロ設計＞という2つの視点に分けて全体の設計を組み立てることとした。

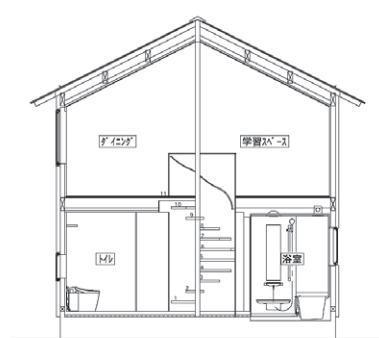
2つの異なる視点をもつことでスケールの異なる考え方を1つの空間で連想的に繋ぐことが出来るのが建築の設計であり、その接続が多様で開放的であることが豊かな家の条件であると考え、そのような家であることを願う。



1階平面図



2階平面図



断面図

【大規模建築部門】

【奨励賞】越前町役場本庁舎

設計監理：(株)木下設計 木下 貴之・梶 久二雄
施 工：(株)松田工務店 (株)キョエイビルド
タケウチ住建(株) 岬建設(株)
特定建設工事共同企業体



【中小規模建築部門】

【奨励賞】つきあたり

設計監理：禄設計 林田 博之
施 工：(株)さがみ建築



【住宅建築部門】

【奨励賞】M-HOUSE

設計監理：(株)BAUM建築設計事務所
岸名 大輔
施 工：(株)BAUM

